

執筆者の素顔（日出彦の巻）

● 素顔の写真

一番困ったのはこの設問だ。何故なら、日出彦は覆面執筆者だからである。といってもゼブラマンやザ・グレート・サスケを想像しても当たらない。似ている有名人を探して掲載することも考えたが、調べると似ているのは写真の発明される以前の人らしいのだ。で、没にした。例えば、姓名判断だと明智光秀と字画が合っているところが多い。性格も似ているし、多分顔も似ていたのではないかと推量する。



個人的には、風林火山でおなじみの山本勘介の方が気に入っているが、多分、的場一佐にでも調査を頼まないと写真は手に入らない。戻ってこないかなあ。

それで、強引だが、自分に似ていると思われる<いるか>君にも代役を頼むことにした。「どこが」と突っ込まれると困るのだが、頭の間とっておこう。



自分で『〇〇いるか』というハンドルネームを付けている位で、憧れの対象なのだ。メールも xxxxxxx@dolphin.memail.jp にしている。超音波を出して会話する芸当が身に付かないかと日夜奇声を挙げている、ことはない。

● これまでに誰に似ていると言われたか？

小学校では目が釣り上がっていたので、「きつね」とか「おきつねさん」とも言われた。「坊ちゃん刈り」というのも綽名だった。この他に似ていると言われた経験はない。Tomy Jr.さんには感心した。いいなあ、いろいろ似ていて。最近腹が出て来て「たぬき」に似てきたと自覚しているが、周りの人は気遣ってか、言葉に出さない。自分の気持ちでは「いるか」に似て欲しいと願っているが、誰も言ってくれない。

● これまで何（誰）になりたかったか？

小学生の頃は体が弱くて、多分1年生のときは20%近く休んでいたのではないかとと思う。よく熱を出して、晴れた昼間にうつらうつら眠っている記憶が今でもある。天井板の木目が回転したり、拡大したりして、体が浮くようになり怖かった。今で

言う幽体離脱をした記憶もあるのだが、話が逸れるので元に戻そう。授業中にもお腹が痛くなって医務室に休眠を取ったりすることがしばしばだった。そんな訳で、小学生時代は大きくなったら医者になって、自分みたいな子供を救おうと考えていた。中学2年の1学期には盲腸になったが、一寸手遅れで腹膜炎を併発し、医者に危ないところだったと言われた。ペニシリンが発見されていたため命を取り留めた。盲腸だけなら普通1週間程度で退院できる筈が1ヶ月以上罹ってしまった。このことから、ますます医者になろうと決心した。先祖に医者だった人がいたのも遠因かも知れない。当家の初代は埼玉県在の農家の長男で、江戸の末期に江戸に出て医術と剣術の修行をした人と言われる。弟に家督を譲り、分家して晩年は養子を迎え、悠々自適の風流な暮らしをしたという。残念ながら、日出彦もうさおもこの人の血をひいていない。その養子というのがやり手で初代の消費人生とは打って変わり、財を起こしたらしい。で、本家に対抗するためか田畑を買い捲ったようだ。大変な逸話の持ち主で、当時人力車で往診していたらしいが、事故を起こして横転して梶棒が太腿に刺さってしまったという。それを自分で麻酔もなしで傷口を縫い手当てをして直したそうである。また、ある夜資産家と見られて泥棒が忍び込んだのだが、日本刀で応戦して泥棒に切りつけ怪我をさせた。泥棒はそのまま何も盗らずに逃げ去った。翌朝やってきた患者の中に自分の切った傷のある者を見つけた。しかし、黙って治療して泥棒から治療代を取ったという。この人の肖像画がその新本家の部屋に掛かっていたが、目付きの鋭い白髯の老人で、子供心にその部屋に入るのが怖かったことを覚えている。

閑話休題。それが高校に入ってから一転し、受験の時は天文学者になろうと決心していた。しかし、当時は宇宙産業などが興る前で、両親から説得され、泣く泣く電気工学への道に進んだ。その他になりたかったのは、小説家とか詩人とかだが、掠りもしなかった。会社員時代は技術者として、好きな研究ができる大学教員に憧れていたが、運命のいたずらでこれだけは思い通りに実現した。

● もう一人の私

うーん、この設問も答えるのが難しい。中村さんのような裏家業はしておりません！もう半分の私ならば、趣味の紹介ができそう。趣味は「集める」である。子供の頃はカバヤ製菓のカードを集めて、世界名作全集の本と交換した記憶がある。内容は忘れたが、「隊長ブーリバ」という表題だった。

会社時代には、海外出張毎にホテルの石鹸集めをしたが、嵩張ると匂いと品がないので続けられなくなった。次に集めたのがレストランのメニューであったが、いまはどこかのダンボール箱の中で眠っている。米国、印度、インドネシア、中国等々のメニューを譲り受けるのには結構苦労があった。自慢はインドで手に入れた

骨の装飾のあるA3大のメニューだ。

いまは現物でなく携帯電話で撮るスナップ写真である。その一つはピクチャーマンホールの収集、もう一つは尼犬狛犬の収集だ。これらは本誌でその内デビューする予定なので、乞うご期待。

● 公開質問

前回の矢澤洋爾さんからの質問が残っていたぞ。要約すると、次の3つだ。

- 1) 今まで行ったところで一番印象に残っているのはどこか？
- 2) 好きな作家、好きな言葉、その他「好きな…」「嫌いな…」こと。
- 3) 自分の子供に「これだけは守れ」ということがあるか？

まず、1)から。「一番」というと、一つだけということだが、なかなか限定するのが難しい。最近では、根室にいて「北方領土」問題の本当の意味を感じたことだろうか。残念ながら、その日は岬に近づくとつれ物凄しい霧に囲まれて数メートル先が見えず、目の前の灯台すら見えなかったのだが。

海外で印象に残っているのはトルコ、ギリシャ、ハンガリーを結ぶアジアと欧州の接点地帯だ。キリスト教の教会とイスラムの寺院が一つの場所に融合して建っているのは奇妙な光景であった。征服の歴史を繰り返した地域というのは、島国で閉社会文化に浸ってきた自分には理解の外であった。人も東西混血の末裔となると飛びっきりの美人や美男が輩出するようだ。このような光景は印度でも見られた。時にヒンディとイスラムの衝突があるものの、普段は両者が共栄している。相容れないものをギリギリのところで妥協して生活している人々をみると、ここでは国内が国際的なのだと分かる。宗教や言葉の異なるいろいろな人種が共存している国は他にもインドネシアや中国にも見られるが、やはり、東西の接点である地域より、緊張感が薄いと言わざるを得ない。わが国でもかつて蘇我と物部の抗争があったけれども、あらゆる宗教を容認してしまう国民性は世界の中では稀有のものと言わざるを得ない。「本地垂迹」というのはこれらの国では到底許されないように思える。印度のヒンディは日本にやや似ているところがある。八百万の神と同じに、ヒンディの神の多さには驚く。神の系図によれば、印度では釈迦は上から10番目くらいのポジションだ。

何かどンドン横道に入ってしまうので2)に行こう。

[好きな作家] かつては泡坂妻夫なら何でもであったが、(もちろん今でも好きだが)、今は西澤保彦の神麻嗣子シリーズにはまっている。江戸川乱歩は全集を揃えて時々読む。あの頃の作家では小栗虫太郎が好きで、文体は悪文といってよいが不思議と惹かれてしまう。黒死館も好きだが、秘境物が面白い。この路線では香山滋も好きな一人だ。

[好きな言葉] さあ、何だろうか？ 四文字熟語かな。七転八起とか。一人二役。二人

三脚。四書五経。五臓六腑。七転八倒。思いつくまま列挙するけど、頭の体操になっていいですよ。桂林奇山。桂花美薫。山紫水明。弧舟驟雨。なんて、どんどん作っちゃいます。

[好きな歌手] 特別対談をよんでね。

[好きな食べ物] 中国に滞在していて移っちゃったみたいですが、何でも。空を飛ぶものは飛行機以外、四本足は机以外は何でも食べちゃうわけですね。印象に残っているのはさそりのから揚げとセンザンコウの炒め物かな。前者は威嚇するスタイルのまま食卓に出てきて、針のある尾がカールしていて、両手のはさみを蠶螂みたいに広げているのですよ。食べると針が口にチクチク刺さって、文字通り刺激的です。味はどうということもありません。後者はパンダ並みの貴重な生物、ハリネズミあるいはアルマジロのような動物らしいです。これはすっぽんみたいな味で美味でした。

最後に、3)については親として大きなことは言えないので、特にありません。他人に迷惑を掛けないくらいでしょうか。

月並みな答えになったので、ご指名といきますかな。新人が、つまり番号の大きい方が当てられていますので、それを崩しましょう。

いつも締め切りをあおってこられる TICA さんて、どういう人なのか知りたいです。鬼の編集長って感じなので、いわゆる「女史」タイプなのか、はたまた「トレンドィキキャリアウーマン」タイプなのか、まさか萌え系ってことはないよね。(実はうちの研究室の学生達は萌え系を自認してしまして、研究室に入る前は秋葉系でバイトしていた女子学生もいるので驚きです！)

質問は矢澤さんからのリレーで好きなシリーズと行きましょう。それと、四文字熟語を10個くらい作ってみてください。

では、ではよろしく。

特別対談： 日出彦の素顔

某月某日。みなと近くの横浜のカフェにて。

日出彦は木田公一と待ち合わせるようになっていた。定刻に木田は現れた。

木： やあ、久しぶり。少しふとったのではないか。

日： (太ったといわれ、少し気を悪くしながら) あいかわらずだねえ。飄々と世の中を渡っている君には分からないだろうが、随分と苦勞をしているのでね。

木： ではやけ食いのせいかな。

日： ともかくだ、今日は例の Dokugaku¹⁾から執筆者の素顔というコラムを頼まれたの

で、君にも手伝って貰おうと思って呼んだんだ。

木： まだ、あの雑誌に付き合っていたのか。

日： 雑誌というより、同人誌というか・・・。

木： また、代筆を請うというのではないだろうね。

日： （慌てて）そんなことないさ。僕との対談で、僕の人となりを紹介してくれればいい。

木： 人となりね。

日： 何だよ、その目は。ほめるんだよ。思いっきり。

木： よし、よし。で、最初の項目はなんだ。・・・素顔の写真？ 君はいつも背伸びをして生きて来たから、かかとを大地にしっかり着けた写真とか。

日： まぜかえすなよ。写真は出さない！

木： こういうのは、誰も知らないのだから、ホームページからチョコッと拝借してきた自分の写真として載せるのだよ。レッサーパンダの写真なんかどうだ？

日： だめ、パンダのイメージが崩れる。

木： こんなのはどう。



この中にいますっていうのは。

日： 止めてくれ。写真の人に悪いよ。

木： で、次の御題はと。誰に似ているかだと。それは「自分」間違いない。

日： それじゃあ、ドッペルゲンガーだよ。あるいは、ドリアングレイとか。

木： ドリアンって食べたことがあるか。

日： なんだよ、いきなり。食べたよ。インドネシアで。バンドンからジャカルタに帰る途中のブンチャック峠のあたりで。

木： くさかっただろ、果物の女王は。

日： それはそうだが、味は良かった。

木： それが君だよ。ドリアンに似ている。

日： 何だか、好意的なのか、けなされているのか。

木： 次に行こう。誰になりたかったかだつて。

日： これはパス。

木： 本当は世之介になりたかった。

日： 男なら一度は考える。

木： ゴジラとモスラ。どっちになりたい？

日： もちろん、ゴジラなんだが、モスラも棄てがたい。三段変態というのが魅力だな。小人の妖精がおまけに付いてくる。

木： 俺はキングギドラだよ。

日： あれ、ずるいよ。そういうのは。

木： こんなのはどうだ。メタルーナ・ミュータント。あわれ美女の運命や如何に。



日： もう一度見たいな、宇宙水爆戦。原題は”The Island Earth “っていうんだ。ジェフ・モローのエクセターがいい。

木： 「もう一人の私」か、次は。また、ドッペルゲンガーに戻ってきた。

日： 大学の研究室は誰も文句を言わないので、もう一人の私の実現に格好の場だ。ある先生のところはプロペラ飛行機の写真で部屋が埋まっていた。他の先生は熱帯魚だ。厨房になっている研究室もある。

木： 最後のは創っただろう。

日： すまん。一寸滑った。

木： で、君のところはみゆきさんでいっばいか。

日： まあ、そんなところかな。

木： 照れるな、照れるな。

日： 食料は1週間分位保管してある。でも、ダイエット食品なので、学生だったら3日分くらいかな。

木： ところで、イオンド大学って知ってるかい。

日： (一寸恥ずかしく思い) いや、知らないが・・・。

木： あのUFOの矢追純一が学部長をしている。未知現象研究学部というんだ。UFOLOGY学科、超能力学科、心霊現象学科、超考古学学科、超常現象学科および超科学科という構成だ。

日： 魅力的だねえ。

木： それだけ？ 入学してもう一人の私探しをしたらどうだろう。

日： ……

木： さて、今夜はここまでか。これで日出彦のことが読者にも分かっただろう。

日： そうかなあー。

(注)

1) Dokugaku では、かつて中吊り小説の解説を頼んだことがある。